

進鴻溪の思想と詩風

——『鴻溪遺稿』の詩文を中心として——

菊地 誠一

はじめに

進鴻溪（一八二一—一八八四）、諱は漸、字を于逵（幼い頃は和作）といい、昌一郎と称す。鴻溪はその号で、他に鼓山・祥山・歸雲とも号したが、晩年は祥山が通称となっていた。山田方谷門下の一人であり、幕末の松山藩士として藩の内外に奔走し、維新後は主として教育に従事した人物である。鴻溪の幕末当時の活躍を知るには、山田方谷を中心とした藩政関連の往復書簡を集めた『魚水實録』^{〔1〕}が好資料であるが、本稿ではこの人物の思想と詩風一般について考察すべく、進鴻溪の遺書である『鴻溪遺稿』を扱う。

『鴻溪遺稿』は、明治三九（一九〇六）年十月刊、二巻二冊から成る線装本で、上巻は文章篇、下巻は詩篇を中心とした構成となっている。また、上巻には幕末に同じく松山藩に仕えた三島中洲の「鴻溪進先生墓碑銘」（以下「墓碑銘」と記す）、下巻には鴻溪の次男である潜（龍男と称す）の「鴻溪進先生行状」（以下「行状」と記す）が収載されており、人となりに就いては、この二篇を中心に記していく。

一、進鴻溪の生涯に就いて

鴻溪は、文政四（一八二二）年十月十五日に生まれた。父の吉敦（佳一郎と称す）⁽²⁾は、村上信滿の嗣子となり、信滿の娘と結婚し二男一女に恵まれたが、その次男が鴻溪である。

幼くして穎悟であった鴻溪は、四く五歳で句読を受ける。しかしながら、この時の師が誰であったのかについては、その記録が残されていない。十二歳になると新見藩の丸山鹿川の門人となり儒学を学び、学問は大いに進歩する。十八歳には、川面村の藤井仲右衛門延年という人物の養子となり、その次女と結婚をする。松山藩の山田方谷に従学したのも同年（天保九〔一八三八〕年）である。

方谷門下となった鴻溪は、学友が発病を心配するほどの熱心な勉学ぶりであったが、果たして大嘔血をするに至ってしまふ。「行状」では、その生々しい様子を以下のように記している。⁽³⁾

是に於いて、方谷山田翁に松山藩に従ひ、刻苦勉励す。學友其の病の生ずるを恐れ、屢々以て言を爲す。一日大嘔血するも、手は猶ほ卷を釋かず。

於是、従方谷山田翁于松山藩、刻苦勉励。學友恐其生病、屢以爲言、一日大嘔血、手猶不釋卷。

この一文は、方谷に従学していた当時の鴻溪の学問への真摯な態度を示す好資料といえよう。学友が発病を心配するほどの熱心な勉学ぶり、そして大吐血にもかかわらず書物を手放さなかつた学問への信念と執念が表れた一文といえる。

天保十四（一八四三）年、二十三歳の時には贅を佐藤一斎に執り昌平黌に遊学する。一斎の下で大いに学問を延ばした鴻溪は四年間の遊学を終え帰藩する。柳澤伯民や南摩子張、菅野狷介たちと切磋琢磨したのもこの頃である。また、鴻溪と

同国であり、当時文壇に頭角を現してきていた阪谷子絢と好敵手的な存在でもあったのもこの頃である。

阪谷子絢との交流はその後も続き、『鴻溪遺稿』には次のような詩がみえる。二首中のその一。

丁巳十月。江原興讓館教授阪谷朗廬、

及備後五弓士憲、阿波柴緑野、來訪。

及び備後の五弓士憲、阿波柴緑野、來訪す。

朗廬有詩見贈。即次其韻却似。

朗廬詩有りて贈見る。即ち其の韻に次し却って似す

廿歳情親文墨中 廿歳の情親文墨の中

欽君名望轉加隆 君の名望轉た隆を加ふるを欽ふ

尋盟倍覺金蘭密 盟を尋ね倍す覺ゆ金蘭の密なるを

論學深知肝膈公 學を論じ深く知る肝膈の公なるを

絃誦行成興讓化 絃誦の行成る興讓の化

經綸已見育英功 經綸の已に見る育英の功

一窓燈影連宵酒 一窓の燈影連宵の酒

愧我依然狂態同 愧づるは我依然として狂態の同じきを

丁巳とは、安政四（一八五七）年、鴻溪三十七歳。共に教育職にあり、学問の中に親交と名声を深めた鴻溪と朗廬の姿が

浮き彫りにされた詩であるといえよう。

なお、結句の「愧づるは我、依然として狂態の同じきを」は鴻溪の謙辞、或いは自戒の言葉ともいえるが、鴻溪の人柄を表している一句といえよう。

さて、国許より江戸へ昌平黌に遊学し、特に佐藤一斎に学ぶという修学パターンは、師の山田方谷や同門の三島中洲にも見られるもので、あゝ意味では方谷門下のエリートコースともいえる⁽⁴⁾。

帰藩後の鴻溪の下には子弟も集まりだし、師の山田方谷とも親密に連絡をとりあい、師弟は公私に渡って助け合った。

弘化三（一八四六）年、二十六歳の時に藩主板倉松叟より俸禄三口にて藩士に召され、嘉永四（一八五二）年三十一歳には五口、翌年には八口と順調に俸禄を増やしていく。

その後、藩校の会頭となり、安政三（一八五六）年三十六歳の時には学頭となっている。

その翌年、方谷を介して藩主の書状を持ち、三島中洲へ出仕を勧めるために動いた。この顛末については、「与進督学書」⁽⁵⁾に詳しい。また、夙に知られる河井継之助の来訪もこの頃である⁽⁶⁾。

文久元（一八六一）年、四十一歳の時には吟味役となり元締を補佐し、翌年には大阪にて藩務を行い、同三年には京都にて取次役となり文武目付を兼務し、更に学頭も兼務することになった。

元治元（一八六四）年、鴻溪四十四歳以降は幕末の騒然とした中で広島や大阪を始めとした藩の内外に活動をしていくことになる。この当時の詳細に就いては、前述の『魚水實録』に詳しい。

その間に、尾州都督府節度、撫育総裁農兵頭、学頭（再任）、洋学総裁、町奉行等、行政や教育に従事する。

維新後は、文教官、権大参事に公議人を兼務し、東京にて奉職する。辞職後は、少参事となり文教官を兼務することとなる。

なお、「行状」によると安政二（一八五五）年に進氏に改姓したことが記されている。鴻溪の姓については、誕生時には村上氏、天保九（一八三八）年に養子に出て藤井氏、そして進氏と姓が都合三変している。厳密にいうならば、明治三（一八七〇）年春頃に一時期ではあるが、藤井姓となつて文教官を任ぜられていたが、ほどなく進姓に戻したという記載が残

っているので、五変したということになる。

その後、岡山に帰り廃藩置県に伴い漸く自適の生活に入り、後学の教育を行う。これが、いわゆる鴻溪の私塾「閑閑舎」である。維新後は、門人が出仕を勧めるも断り続ける。

明治六（一八七三）年、五十三歳、岡山県の招聘に応じ備前天城中學に教授し、堺県師範学校の教官にもなり、その傍らに家塾「潜龍舎」を開く。

明治十（一八七七）年、五十七歳、それまでの職を辞し、播州赤穂の人の招聘に応じて私塾「隨鷗學舎」を開く。

赤穂から向かう様子、そして私塾の命名について『鴻溪遺稿』には次の詩題を付した一首が見える。四首中のその四。

丁丑三月應赤穂人之需、來講學於遠林
丁丑三月赤穂の人の需に應じ、來りて學を遠林蘭若に講ず。

蘭若。其東隣爲隨鷗寺。予喜其名雅、
其の東隣は隨鷗寺爲り。予其の名の雅にして、而も予の遊踪

而予遊踪頗肖焉、取以名其舎。因得數絶。
頗る肖たるを喜び、取りて以て其の舎に名づく。因りて數絶を得。

掃去都門十丈塵 掃き去る 都門十丈の塵

又爲風月自由身 又風月自由の身と爲る

前村試杖何邊好 前村試みに杖らん何れの邊か好し

不是松坡即柳津 是れ松坡にあらず即ち柳津たり

眼目は一／＼二句目であろう。この年、前職を辞して自由の身となった鴻溪の心境をありのままに記した一句といえよう。

三／＼四句目は、松山より赤穂にやって来た事実を描写する。「松坡」は、松の山林が広がる松山のイメージ、「柳津」は、詩題中の「隨鷗寺」からも連想されるように、柳の緑が揺れる赤穂の港町のイメージ。

さて、このように鴻溪は明治十年より赤穂に講学しているが、翌年には故郷を想う内容の詩が作られている。詩題の割注に「時在赤穂（時に赤穂に在り）」と記された新年の詩がそれである。三首中のその三。

戊寅新春試筆

戊寅新春試筆

吟花醉月句将新 吟花醉月 句将に新たならんとす

出岫閑雲又值春 出岫閑雲 又春に値ふ

白髮未容輕嘆老 白髮 未だ輕しく老を嘆ずるを容さず

家山尚有八十親 家山に尚ほ有り 八十の親

一、二句目は、新春の心情と情景を詠った常套句ともいえるが、注目すべきは三、四句目であろう。「八十親」とは、鴻溪の父親を指す。『鴻溪遺稿』所収の「村上氏家譜畧録」及び「先人松園履歴」によれば、鴻溪の父である吉敦は、明治十四（一八八二）年九月七日に八十六歳で病逝している。よって、嚴密には明治十一（一八七八）年新年当時は八十三歳となる。異郷の地にあつても、親への孝の気持ちを忘れない鴻溪の人柄が出ている一句といえよう。

鴻溪が赤穂より故郷の岡山への帰途についたのは、二年後の明治十二（一八七九）年三月になる。『鴻溪遺稿』には次の一詩が見え、其の時期を裏付ける資料となっている。

己卯三月九日自赤穂歸途、宿岡山。 己卯三月九日赤穂自りの歸途、岡山に宿す。

次壁幅柳北之韻、與柴原爲別。 壁幅の柳北の韻に次し、柴原と別を爲す。

何日家山容掛冠 何れの日にか 家山に容に掛冠すべきも

栖栖未得一枝安 栖栖として 未だ一枝の安んずるを得ず

與君今夜又爲別 君と今夜 又別を爲す

風雨落梅春尚寒 風雨梅を落とし 春尚ほ寒し

三、四句目は詩題にもある通り、柴原なる人物との留別と情景が記されているが、注目すべきは鴻溪の心象が綴られている。二句目は、一句目を受けて「栖栖」や「一枝安」といった『論語』憲問篇や『莊子』逍遙遊篇の語句を用いた上で、⁽⁷⁾ 隱棲生活を希むものの、教育に於ける多忙な日々は今しばらく続くことを示している。「齷齪と忙しく（栖栖）」、「鷓鴣が森林の一枝に巢を掛けて安居する（一枝安）ことすらできない」と詠ずるなかで、鴻溪自身を「鳥（鷓鴣）」に擬えているのである。「行状」には、一、二句目を裏付けるように、その後、備中の中井村や作州落合等の招聘に応じて教授し、四方から学びにくる者は常に数十人から百人に及んでいた、という内容が記載されている。

なお、赤穂での鴻溪の行跡を知るには、菊楽末一氏「播州赤穂と進鴻溪⁽⁸⁾」を参照されたい。それによると、鴻溪には『仙槎奇篇⁽⁹⁾』という漢文体で書かれた小豆島探訪記が存在するという。しかしながら、当該資料について筆者は未見であるため、今後も調査・研究を続行し、稿を改め報告したいと思う。

明治十五（一八八二）年、六十二歳の春、栃木県からの招聘があったが、決心のつかぬ鴻溪は三島中洲に相談し、ついに意を決して赴任を決めた。

栃木では、師範学校中学校で一等教諭として、また地元の人々の要請に応じて栃木義塾で教授した。

なお、栃木義塾と鴻溪の関わりを知るには、菊楽末一氏『人物紹介』山田方谷の高弟・進鴻溪の晩年⁽¹⁰⁾』を参照されたい。菊楽氏は、

祥山（鴻溪の晩年の号）が栃木へ招かれて子弟の教育をしていた栃木中学（栃木師範）は、明治十七年県庁が栃木より宇都宮へ移転すると共に宇都宮へ移り、現宇都宮大学学芸学部が創立以来受け継がれているが、戦災で当時の資料は皆無、然し幸いにも栃木市に於て市史編纂の資料を蒐集の結果、当時の新聞その他によつて、明治十五年栃木義塾遷喬学舎設立に、祥山は栃木師範教諭として参与し、その開校式には祝詞・祝詩を詠せられている事がわかつたのである。と記し、明治十五（一八八二）年十一月四日の栃木新聞を引用する。鴻溪の祝詞とは、

今茲明治壬午（明治十五年、一八八二）の冬、予栃木県に在りし時、本土の有志、協同し相議し、一学舎を設立し、号して栃木義塾と曰ふ。予及び二三の教員を聘して、其の子弟をして専ら漢籍に従事し、先づ脩己成人の基址を建て、終に経世遠大の業に進ましむるは、豈に之を懿挙と謂はざるべけんや。乃ち本日をして、県郡諸紳士及び師範中学両校職員、県町会両議員、新聞編輯等諸君に請ひて、以て開業の式を施行す。予輩亦た与りて榮有り、因て二十八字を賦し、其の盛大なる結果を期して、以て祝文に代ふ。

進 祥山 識す

今茲明治壬午（明治十五年、一八八二）之冬、予在栃木県時、本土有志、協同相議、設立一学舎、号曰栃木義塾。聘予及二三教員、使其子弟専従事漢籍、先建脩己成人之基址、終進経世遠大之業、豈可不謂之懿挙乎。乃以本日、請県郡諸紳士及師範中学両校職員、県町会両議員、新聞編輯等諸君、以施行開業之式。予輩亦与有榮焉、因賦二十八字、期其盛大結果、以代祝文。

進 祥山 識

というものであり、栃木義塾の設立意義と設立経緯の顛末が記されている。そして、「因りて二十八字を賦す」とする祝詩とは、

烟雨全収恰令辰 烟雨全く収まり 恰も令辰たり

高堂論学宴群賓　高堂に学を論じ　群賓を宴しましむ

道般結果吾能証　道般の結果　吾能く証す

出谷鳥啼天地春　出谷の鳥啼く　天地の春

という七言絶句。一、二句目は、晴天に多くの群賓に対して講演を行うという盛大なる式典の情景描写。三、四句目は、盛大なる式典の様子に対する鴻溪の心象描写が記されている。特に結句には、栃木義塾開学という一区切りを迎えることができた鴻溪の喜びが表現されている。なお、三句目の「道般」は「這般」の誤植か。

翌年五月、病を得て職を辞して岡山に帰り、病が癒えてからは家塾を開いた。

明治十七（一八八四）年九月三日、中風に罹ること数ヶ月に及び、肺病を併発し、十一月二十一日に長逝した。享年六十四歳。佛諡を鴻溪院釋靜儒伯居士という。

また、前出「墓碑銘」には、

先生の資性、温和にして勤飭、善く人と交はる。躬肥へて腹は便り、豪飲數斗なるも亂れず。醉へば則ち善笑聲四隣に徹す。人、戯れに呼びて笑一郎と曰ふ。昌と笑の邦音同じきを以てなり。

先生資性、温和而勤飭、善交人。躬肥而腹便豪飲數斗不亂。醉則善笑聲徹四隣。人、戯呼曰笑一郎。以昌笑邦音同也。と記されるが、その風格をもって、以下のように鴻溪の一生は幕末にあつては藩政に、維新後は教育に奔走したのであつた。次章では、鴻溪の思想・学問に関する資料を『鴻溪遺稿』上巻の文章篇を中心として求めてゆくこととする。

二、鴻溪の思想について

『鴻溪遺稿』の中には、深く思想に関わる詩文はさして多くはない。

例えば、

忠孝は吾が家の寶、經史は吾が家の田なり。

忠孝吾家之寶、經史吾家之田。

とあり、忠孝の徳目を大切に考え、經書や史書の重さには言及するものの、残念ながら具体性には欠ける。

また、学問の時代的特質を記しているものとして、

晋人は清談、宋人は理學。晋人を以て俗を遣り、宋人を以て躬を禪にす。之を合すれば雙びて美なるも、之を分てば

兩つながら傷る。

晋人清談、宋人理學。以晋人遣俗、以宋人禪躬。合之雙美、分之兩傷。

というように、バランスのとれた主張がみられる。

晋代と宋代の学問の特質については、この他に、

世に理の必し難き所の事多し。宋人の道學に執する莫れ。世に情の通じ難き所の事多し。晋人の風流を説ぶ莫れ。

世多理所難必之事、莫執宋人道學。世多情所難通之事。莫説晋人風流。

とあり、学問を処世に活かす姿勢が顕著であるが、思索の深まりは見出せない。

經書自体に言及しているものとしては、『春秋』及び『周易』について次の一句がある。

春秋を讀めば、人事上に在りて天理を見、周易を讀めば、天理上に在りて人事を見る。

讀春秋、在人事上見天理。讀周易、在天理上見人事。

『春秋』と『周易』両者の主眼の異なりを、「天理」と「人事」というタームで適切に描き出している。

この他にも、『鴻溪遺稿』の中に直接的に学問について記載された鴻溪の思想が何えそんな数編を抄出し、その一端をみてみよう。

天我が福を薄んずれば、吾れ吾が徳を厚くして之を迎へん。天我が形を勞すれば、吾れ吾が心を逸して之を待たん。
天我が遇を陋すれば、吾れ吾が道を修めて以て之に安んぜん。是れ亦た君子人のみ。

天薄我福。吾厚吾徳以迎之。天勞我形。吾逸吾心以待之。天陋我遇。吾修吾道以安之。是亦君子之人而已矣。
これは、鴻溪が君子の在り方を示した一文といえる。

「天勞我形」について、類似表現としては『莊子』内篇大宗師に、

夫れ大塊は我を載するに形を以てし、我を勞するに生を以てし、我を佚するに老を以てし、我を息するに死を以てす。
故に吾が生を善くする者は、乃ち吾が死を善くする所以なり。

夫大塊載我以形、勞我以生、佚我以老、息我以死。故善吾生者、乃所以善吾死也。

という一文が見え、内容的方向性や鴻溪の教養レベルから見ても、典故としている可能性は高い。

天の存在を認め、その運行に対し自信の修身を充実させて享受するという内容も同じ方向性のものといえよう。そして、それが鴻溪の理想とする君子像の要因の一つと考えられる。

では、「君子」というキーワードについて、更に他条を見ていくことにより、鴻溪の君子観を考えてみよう。

君子は晴天に對しては懼れ、雷霆を聞くとも驚かず。平地を履みては恐れ、風波を歩むとも駭かず。

君子對晴天而懼、聞雷霆而不驚。履平地而恐、歩風波而不駭。

ここでは、現実の出来事には心を乱さず、平時には戒慎恐懼し、有事には不動心であるのが君子とされている。しかも、前出の「天我が…人のみ」と同様に、自然の運行、つまり天の存在に対して、修身を行うことによって対峙するという内容も、同じ方向性だといえる。

また、

丘山の善を積むも、尚ほ或ひは君子と爲さず。絲豪の利を貪れば、便ち小人に陥る。身を修むる者以て謹まざるべからざるなり。

積丘山之善。尚或不爲君子。貪絲豪之利、便陷于小人矣。修身者不可以不謹也。

とも記し、ここでも戒慎恐懼を説き、君子を志向する自らの修身への思い入れを示している。

次に、陽明学に関わる詩文について見ていこう。

鴻溪の次男、潜による「行状」には、

先生經を講ずるに専ら新安を奉ずと雖も、晩年は則ち頗る姚江を取る。箴を易ふ前數月大學を講ずるに、王朱を折衷す。絜矩の章を説くに尤も詳たり。

先生講經雖專奉新安、晩年則頗取姚江。易箴前數月講大學、王朱折衷。說絜矩之章尤詳。

とあり、中洲の「墓碑銘」にも

學は朱王を奉じ、詩文を善くす。

學奉朱王、善詩文。

の一文が見え、その儒学思想と教育方法の一端は伺い知ることができる。

朱子学から陽明学に進む教育順序も師の方谷、同門の中洲と符合する。また、鴻溪の晩年、つまり維新後に王学を多用するという内容も、方谷の教育方針と暗合することから大変興味深い。

更に、次の詩も大変に興味深い。二首中のその二。

三月初四夜、與諸子同讀傳習録。有感、三月初四の夜、諸子と同じく傳習録を讀む。感有りて、

賦似。次方谷山田翁所寄閑谷行中詩韻。賦して似す。方谷山田翁の寄す所の閑谷行中の詩韻に次す。

須認天人本一源 須く認むべし 天人本と一源なるを

靈光不擇靜兼喧 靈光は擇ばず 靜は喧を兼ねるを

夜窓偶對遺編讀 夜窓偶々遺編に對して讀む

糟柏何曾有道存 糟柏何ぞ曾ての道の存すること有らん

この詩は、『鴻溪遺稿』所収の前後の詩から推測するに明治六（一八七三）年の作。

この年は、前述の通り天城中学・堺県師範学校・家塾の潜龍舎にて子弟を教育していた時期であり、詩題の「諸子」とは或いは何れかの子弟を指すのであろう。

一、二句目は、鴻溪の『傳習録』理解について考える上で興味深い。王学にみられる一元的性格を、天人合一や体用一致といった内容で、断片的括りではあるが示している。

三、四句目は、鴻溪の『傳習録』自体に対する評価を考える上で興味深い。特に四句目。「糟柏」は、「糟粕」の誤植。「糟粕」については、古いところで例えれば、『淮南子』道應訓では「真実とは聖人の心に秘められ、糟粕である所の書物が残った」といった流れで、『老子』第一章を引用する。⁽¹¹⁾更に言えば、山井湧氏に「聖人の糟粕」という論文があり、⁽¹²⁾

参考になる。山井氏は、論文の結論部分に曹端の「聖人の糟粕」に関する趣旨として、

經書には人が道を認識するための基本的な素材を提供する役割を果すだけで、經書そのものに「眞」は求められないから、その意味で經書は糟粕なのであり、最後は心の問題だ。

と記し、心学と經書の相対的論述の中にも心を重点に置く傾向を指摘しており、そこから当該詩の「糟粕」を讀解する糸口が見出せよう。

また、山井氏は心学に就いての説明として、

心學の立場は、心を重んじ、心の偉大さを説くものであるから、道や理を心（わが心）に自得することを強調するのが普通で、そこから、道や理を求めるのに、書物（その中の尤も權威のある重要なものが「經書」である）に求めるよりも心に求めよ、という主張が自然に出てくる。また、心の主體的な權威を強調するところから、心が道や理の實體であつて、經書は心の投影だ、という考え方も生じてくる。少なくとも、心に經書と同等あるいはそれ以上の權威を認めようとするから、心の權威と相対的に經書の權威を低めるような表現がなされる。これが心學の持つ一般的傾向だといえる。とも記す。ここでも、心学と經書が相対的ながらも、心に重点が置かれていることが強調されている。

当該詩の「糟粕」の解釈も「心の權威と相対的に經書の權威を低めるような表現がなされる」こととなり、「最後は心の問題」となり、「心に求めよ」となる。つまり、鴻溪の「糟粕何曾有道存」の結句は、經書にのみ理を求めるのではなく、心に自得することこそ大切だという心学的解釈がなされるべきであろう。同時に、鴻溪の心学理解や、方谷から鴻溪への学問伝授の一端も窺い知ることができるといえる。確認するまでもないことではあるが、『傳習録』は鴻溪にとって、經書と同等の扱いであったということである。

また、このほかに陽明学に関わる詩文を見ていくと、

聖人の氣象を見んと欲すれば、須らく自己の胸中潔淨の時に之を觀るべし。

欲見聖人氣象、須于自己胸中潔淨時觀之。

と記す。これは、王陽明の明鏡説に暗合する。胸中を澄ませ、聖人の氣象へとその觀照が向えば、その真意を得ることができるといふ。ここでは、特に君子¹¹聖人とする根拠を得ず早計かもしれないが、理想とすべき人間像への方向性を示す一端として、より具体的な記載として参考となるのではないだろうか。とすれば、修身の範疇の一つとして「胸中潔淨」といふ方向性も見えてくる。

ならば、胸中を潔淨にすべき指針として、

波風を世上に作さざれば、自ら氷炭の胸中に到ること無し。

不作風波于世上、自無氷炭到胸中。

という一文も興味深い。

これは、視点を転ずれば世上に波風が立てば、胸中の調和が乱れる事が示唆される訳であり、鴻溪に於いては世上と胸中という二点の概念を、一元的に包括する趣きが見てとれる。

更に、世上に於ける氷炭の一例として、

笑を買ふは易く、心を買ふは難し。

買笑易、買心難。

という一文がある。

この一文を読み、陽明の「山中之賊、心中之賊」を連想された方も多いであろう。長く幕末の動乱に藩の内外にて奔走していた鴻溪には、その実学的発想は当然のものであったのかもしれない。ここでは「笑」を形而下の概念として、重きにあたる形而上の概念である「心」の対立語として記されている。「糟粕」の問題でも記したように、このように鴻溪の発想には師である方谷の影響もあり、最終的には心を重要視する心学的傾向を見て取れるのである。

次に、鴻溪における文学性を『鴻溪遺稿』下巻の詩篇を中心に見ていこう。

三、鴻溪の詩風について

『鴻溪遺稿』には多くの詩が掲載されているが、鴻溪の詩文作成の眼目については、

作詩には能く眼前の光景、胸中の情趣を把り、一筆にて寫出すれば、便ち是なり。作者唐を説き宋を説くを必せず。

作詩能把眼前光景、胸中情趣、一筆寫出、便是。作者不必説唐説宋。

と記し、その詩風の傾向を窺い知ることができる。

確かに、鴻溪の詩文は目の前の光景や、心中を吐露した表現の詩が多い。「眼前の光景」「胸中の情趣」の具体的な物として、

雪後に梅を尋ね、霜前に菊を訪ね、雨後の蘭を獲り、風外に竹を聴く。固より野客の閒情にして、實に文人の探趣たり。

雪後尋梅、霜前訪菊、雨後護蘭、風外聴竹。固野客之閒情、實文人之深趣。

と記す。また、

志は高華を要し、趣は淡泊を要す。

志要高華、趣要淡泊。

ともあり、鴻溪の詩文作成の傾向を伺うことができる。

それでは、時代と密接に関わった鴻溪の詩文を明治期の作品に見ていこう。

明治初期の社会的トピックスといえ、明治六（一八七三）年に施行された太陽暦の頒布と、明治十（一八七七）年に起きた西南戦争が挙げられる。それらに就いて、鴻溪の感慨を詩中に見ていこう。

先ずは太陽暦への改暦。詩題の割注に「創頒太陽暦（太陽暦を創頒す）」と題された次の詩。四首中のその二。

癸酉新正

癸酉新正

迂儒仍舊唱春王

迂儒舊に仍り 春王を唱ふ

曆法應要據太陽

曆法應に太陽に據るを要すべし

梅未點唇鶯尚默

梅未だ唇を點せず 鶯は尚ほ黙す

但憂吟屐向何方

但だ憂ふ 屐を吟じて何の方に向かふかを

太陰暦から太陽暦への移行は、民間レベルで特に動揺を生じていた。一、二句目に、世間には太陽暦が施行されたが、鴻溪は生活に密着していた旧暦を発布後も基盤としていたことが窺える。「迂儒」とは、鴻溪を指す。いずれにしても、民間と政府を比した対句ではある。そして、三、四句目に、新年早々の太陽暦移行を享受しつつも、その行く末に対して憂いを感じていると結句する。思うに、これは鴻溪のみの感想ではなく、当時一般の印象でもあったであろう。

太陽暦改暦による民間意識について、鴻溪は次のようにも記す。四首中のその三。

改曆新敷周甲子

曆を改め新たに敷く 周の甲子

民間尚慣夏王正

民間尚慣るる 夏王の正

東風回暖知何日 東風の暖を回らすは 知ること何れの日なるか

雨雪連朝不放晴 雨雪の朝を連ねて 放晴せず

一、二句目では、前詩と同様に政府と民間の対比を、中国古代の殷周間の暦法の相違に准えて起句する。新暦への困惑と旧暦への愛着、つまり太陽暦に改暦されたが、民間レベルでは未だ太陰暦に慣れ親しんでいる様子を記す。その理由として、三、四句目に、今までの生活習慣が太陰暦に密着したものであり、新暦では季節の運行と合致しないというのである。なるほど、確かに年間行事や特に農業関連の人口の多さなど、当時は現代以上に切実な問題を内包していたのだろう。太陰暦と太陽暦、太陽暦移行への順応について、鴻溪は次のようにも記している。詩題中、唯一の五言絶句でもある四首中のその四。

衣冠新暦日 衣冠は暦日に新しく

梅柳舊春風 梅柳は春風に舊し

並行不相害 並び行われて相害せず

亦知造化工 亦た知る 造化の工

一、二句目は、再三記している通り、旧暦から新暦への移行に就いて記す。注目すべきは三、四句目。突然の太陽暦への改暦に途惑いつつも、新暦の中に旧暦を対応させていく事実が記されている。これは、民間レベルでも同様であったのだろう。

旧暦から新暦への改暦は、当時の新政府の財政難に起因し、十分な検討と時間を費やさずに施行されたと言われている。⁽¹³⁾突然の改暦に対し、民衆は法としては新暦を用い、生活上には旧暦を用いる事となった。つまり、新暦に旧暦を重ね合わ

せる事によつて新曆を受け入れようとしたのであろう。

さて、次いで西南戦争。詩題の割注に「時西南兵起（時に西南に兵起つ）」と記された詩。三首中のその二。

有感時事

時事に感有り

書窓何事感偏生

書窓に何事か偏おろ生あしきを感じず

聞説西征未罷兵

聞説きくならく西征して未だ兵を罷めずと

天道是非向誰問

天道 是か非か 誰に向かひてか問はん

元勲又負賊臣名

元勲又負ふ 賊臣の名

一、二句目は、西南の役が起つた事実を伝え聞く様子。三、四句目は、鴻溪の西南の役に対する感慨ともいえる言葉であらう。特に四句目、明治維新に功績のあつた人々が、今は賊臣と言われている。明治維新にあたり、いわゆる賊軍の立場にあつた松山藩の臣下であつた鴻溪の想いは複雑であつただろう。これは、三句目「天道是か非か」の引用にも現れている。この言葉は、夙に有名な司馬遷『史記』の太史公自序の結部。天道の是非を問いかける文脈の裏にある、天道は是であるべきという気持ちを抱きつつ、結句へと繋ぐ。

更に、鴻溪の感慨は続く。三首中のその三。

千歳誰分姦與忠

千歳誰か分つ 姦と忠と

天誅又見及元功

天誅又見る 元功に及ぶを

欲逢俊傑問時務

俊傑に逢ひて 時務を問はんと欲す

世上何人は伏龍

世上何人か 是れ伏龍たらん

この詩には、全体を通して鴻溪の西南の役に対する感慨が見て取れる。

一、二句目は、前詩三、四句目と同様の流れを記している。事の是非、分別を繰り返し、歴史に於ける縦横の軸を表現した連句。そして、三、四句目は、西南の役に於ける鴻溪の今後の希望を託した句といえ、更なる俊逸なる人物が現われることへの期待が込められていよう。

鴻溪の詩は、そのような歴史の中にある民衆の言葉をも代弁しているように思われてならない。

おわりに

方谷啓之 方谷之を啓き

鴻溪紹之 鴻溪之を紹ぐ

藩學雖廢 藩學廢ると雖も

文種維遺 文種維れ遺る

綿綿不絶 綿綿として絶えざること

如蠶吐絲 蠶の絲を吐くが如し

魯無君子 魯に君子無くんば

斯焉取斯 斯れ焉ぞ斯を取らん

これは、『鴻溪遺稿』上巻にも収録されている三島中洲撰「墓碑銘」の結句部分。

そこには、師の方谷から鴻溪へ、そして未来へと「文種」が受け継がれていく願いが込められている。その中であって、

鴻溪の果してきた役割は大きい。

「魯に君子無くんば、斯れ焉ぞ斯を取らん」とは、『論語』公治長篇⁽¹⁴⁾の言葉。松山に山田方谷という存在があったからこそ、進鴻溪の人徳と活躍があったのだという示唆であろう。

以上、鴻溪の思想と詩文の特徴としては、常に民間の視線で事象・心象をとらえて表現していることを指摘すべきであろう。また、世上の事実と胸中の心象という両面を、特に心象面に於いて一元的に包括する内容も多く見受けられた。

思想と詩文に関わる記載の中で、一例を挙げるとするならば、思想面では、

悪を爲して人の知るを畏るれば、悪中猶ほ善念有り。善を爲して人の知るを急がば、善處即ち是れ悪根なり。機心の微思はざる可からず。

爲悪而畏人知、悪中猶有善念。爲善而急人知、善處即是悪根。機心之微不可不思焉。

が挙げられ、詩文面では、

黄花紅樹、春は秋に如かず。白雲青松、冬は亦た夏に勝る。春夏の園林、秋冬の山谷、一心に累無く、四季良辰なり。
黄花紅樹春不如秋。白雲青松、冬亦勝夏。春夏園林、秋冬山谷、一心無累、四季良辰。

が好例といえよう。

この他にも、各章に引用してきた詩文を参照して頂ければ、鴻溪の文章の特徴ともいえる事象（世上）と心象（胸中）の「対比↓包括」といった心に重点を置く心学的傾向を見てとれるであろう。更に、それらはすべて民間の視点から描かれていることも特筆したい。

詩に於いてはいうまでもなく、思想に於いても理想に流されることなく、民衆の視点から現実的訓戒的に記されている。

これは、鴻溪の幕末から明治にかけての経験によるものが大きかった事のあらわれではないかと思われる。

進鴻溪は、山田方谷門下の一人として幕末にあつては藩の政治に、維新後は教育面にと活躍した。その鴻溪の思想と詩風に就いて研究することは、幕末から明治にかけての日本思想史を考える上で、就中方谷門下の系譜を考える上で意義があろう。

本稿は、鴻溪の思想と詩風に就いて、その概略を記したに過ぎず、より一層の多角的考察が必要である。それは、より深い思想面の考究や、詩風面の考察、更には、幕末時に於ける藩政面での活躍や、師の山田方谷や同門の三島中洲を中心とした交友関係などである。紙数の都合もあり、本稿ではそれらについて言及する事はできなかったが、稿を改め、研究を進めたいと思っている。

注

(1) 『魚水實録』は、國分胤之編、舊高梁藩親睦會を發行所とする乾坤(上下)二卷からなる洋装本。各卷の奥付によれば、乾(上)卷は、明治四十四(一九一一)年八月十五日發行。坤(下)卷は、同年十二月二日の發行となっている。

本書の發行及び命名の由来については、三島中洲(当時八十二歳)が序文の後半部分に次のように記している。

頃日、同藩の遺士國分胤之、先生の建白草案、及び藩士と先生との往復書簡を編纂し、以て一書と爲し、當時實際の一斑を後昆に示さんと欲し、名を余に問ふ。余曰く、公の先生有るは、猶ほ魚の水有るがごとし。先生其の始を善くし、其の終を全ふし、終始相離れず、以て之を保護す。宜しく名して魚水實録と曰ふべしと。遂に其の言を書して以て序と爲す。

頃日、同藩遺士國分胤之、編纂先生建白草案、及藩士與先生往復書簡。以爲一書、欲示當時實際一斑於後昆、問名於余。余曰、公之有先生、猶魚之有水。先生善其始、全其終、終始不相離、以保護之。宜名曰魚水實録。遂書其言以爲序。

また、本書の内容に就いては「緒言」三十篇中の一〜二に詳しい。

一 魚水實録に掲載する處のものは、舊主板倉松叟公の御自筆の書面、山田方谷先生の建白答申往復の書面、其他諸氏の書面等、悉く現書に因て寫取ものして、十中八九は三島中洲翁の所藏、一部は山田準氏の所藏、尚少部分は諸家の所藏にして、何れも現書に依りたるものなり。

一 大坂用達河内屋辰助、其他用達飛脚屋等の書状、或は落書風聞所等多くあり。必用のものに非すと雖も、當時藩士閉居中世間の事情に暗く、風聞によりて或ひ悦ひ或は憂たる事柄を察するに足らんか。又辰助の通信頻繁なるは同人か國事に盡粹し呉たるを知るへし。又相庭の通信は度支（藩財取締）に於ては最大切なる事なれば、當時の事情を察する爲め記載する事とせり。

本書の内容に就いては、國分胤之の自序にも詳しいが内容の重複が生ずる爲に省略する。

(2) 鴻溪の父である吉敦は、『鴻溪遺稿』所収の「村上氏家譜畧録」及び「先人松園履歴」によれば、村上氏第十一世、諱は吉敦、松園と号した。初めは伍藏と称し、後に佳一郎と改めた。佛號を謙光院順道松園居士という。理財に優れ、勤儉と苦勞の結果、醸酒業により資産を豊かなものとした。また、文政中に帯刀を許され、弘化中に永世の称姓と帯刀を許され、文久中に士格並を賜つた事も特筆すべきであろう。

(3) 「行状」にて、於是、從方谷山田翁于松山藩、刻苦勉勵。學友恐其生病、屢以爲言、一日大嘔血、手猶不釋卷。と記された一文は、『墓碑銘』では、從遊方谷山田先生於松山藩。刻苦勉勵。遂疾嘔血、手猶不釋卷。に作る。なお、本稿の漢字表記については極力テキスト通りの記載に努めたが、第一、第三水準の漢字使用に止め、可能な限り作字等は行っていないため、遺憾ながらテキストの完全な復元の爲されていない箇所もある。

(4) 山田方谷門下の遊学と學術習得に就いては、拙稿「三島中洲の陽明学自得時期について」(二松学舎大学陽明学研究所『陽明学』第八号—山田濟斎特集号)の「三 結論」に記した。同書、五四頁—五六頁参照。要約すれば、江戸及び佐藤一斎の元に遊学する事は、方谷及び門下生に見られる特徴で、その教育方法(學術取得)も、朱子学を学んでから陽明学を学べば道を違える事はないというものである。

(5) 「與進督學書(進督學に與ふる書)」は、「中洲三島先生年譜」によってその経緯を要約すると、安政四(一八五七)年六月六日に、鴻溪が君命によって書かれた方谷の手紙を携え、中洲に出仕を勧めにやって来たが、中洲は直ぐには応じず親族と協議し、幾

度となく熟思して、約一ヵ月後に返答の手紙として鴻溪に齎された。その内容は、仕官後五年の遊学を許すこと。帰藩後も、場合によつては藩外に（学問をする為に）出る事を許すこと。四十歳以前には、教育職以外には就任しないこと。経書を講義する場合、朱注のみに限らないこと。以上の四点であった。鴻溪の復命により、それらは許され、中洲は出仕することとなる。ちなみに、中洲二十八歳、鴻溪三十七歳。「與進督學書」は「中洲文稿」第一集ほかに収載され、研究論文としては、川久保廣衛氏「三島中洲の「七転遷」と「与進督学書（草稿）」」（『三島中洲の学芸とその生涯』戸川芳郎編、平成十一年九月二十日、雄山閣出版発行、四八五～五一二頁）に詳しい。なお、「中洲三島先生年譜」については、拙稿「三島中洲の陽明学自得時期について」（前出）、注（4）、五七頁参照。

（6）河井継之助（文政十（一八二七）—明治元（一八六八）年）は、諱を秋義、蒼龍窟と号した。河井の松山来訪については、河井の旅日記『塵壺』に詳しい。『河井継之助傳』【復刻版】今泉鐸太郎著、小西四郎解題、昭和五十五年二月二十日、象山社発行（四三～九七頁参照）や、『塵壺—河井継之助日記』安藤英男校注、一九七四年八月二十八日発行、東洋文庫二五七（四七～六九頁、一七三～一八九頁参照）が参考となる。

（7）「栖栖」は、『論語』憲問篇に「微生畝謂孔子曰、丘何爲是栖栖者與。無乃爲佞乎。孔子曰、非敢爲佞也。疾固也。」とある。「栖」は、「棲」に同じで、鳥が巢に宿るという意味。「栖栖」は、「棲棲」に同じで、忙しく齷齪するさま、落ちつかないさま、安居しないさま。「二枝安」は、『莊子』逍遙遊篇に「堯讓天下於許由。曰、日月出矣。而燭火不息。其於光也、不亦難乎。時雨降矣。而猶浸灌。其於澤也、不亦勞乎。夫子立而天下治、而我猶尸之。吾自視缺然。請致天下。許由曰、子治天下、天下既已治也。而我猶代子、吾將爲名乎。名者實之賓也。吾將爲賓乎。鷦鷯巢於深林、不過一枝。堰鼠飲河、不過滿腹。歸休乎君。予無所用天下爲。庖人雖不治庖、尸祝不越樽俎而代之矣。」とある。また、『呂氏春秋』慎行論篇にも関係の記載が見られる。

（8）『高梁方谷会報』第十三号、平成三（一九九二）年発行、九～十頁参照。

（9）明治十（一八七七）年十一月二十五日から二十九日に至るまでの五日間の紀行文。平成に入り、赤穂市の高谷由之氏より高梁市立図書館に寄送されてきた一篇であるという。詳細については、前掲注（8）参照。

（10）『高梁方谷会報』第九号、昭和六十三（一九八七）年発行、九～十頁参照。菊楽氏には、進鴻溪関連の著作として、「播州赤穂と進鴻溪」（前掲注（8）参照）のほか、「鴻溪進先生の顕彰碑高梁市川面町に建立」（『高梁方谷会報』第十二号、平成二（一九九

○年発行。五、六頁参照。、『高梁市の名碑—原文とその訳文』、平成二（一九九〇）年四月、高梁市郷土資料刊行会刊行（昭和六十一（一九八六）年六月刊の復刻増版）、高梁市郷土資料叢書第五集などがあり、参考になる。

(11) 「糟粕」について、『淮南子』道應訓には次のように記されている。

桓公讀書於堂上。輪人斲輪於堂下。釋其椎鑿、而問桓公曰、君之所讀者何書也。桓公曰、聖人之書。輪人曰、其人焉仕。桓公曰、已死矣。輪人曰、是直聖人之糟粕耳。桓公悖然作色而怒曰、寡人讀書、工人焉得而譏之哉。有說則可、無說則死。輪人曰、然、有說。臣試以臣之輪語之。大疾則苦而不入。大徐則甘不固。不甘不苦、應於手、厭於心、而可以至妙者、臣不能以教臣之子。而臣之子、亦不能得之於臣。是以行年七十、老而爲輪。今聖人之所言者、亦以懷其實、窮而死。獨其糟粕在耳。故老子曰、道可道、非常道、名可名、非常名。

また、典故として『莊子』天道篇には「糟粕」を「糟魄」として、関係の記載がみられる。その他には『晉書』卷五十五、潘尼傳にも典故としての記載がみられる。

(12) 『中哲文學會報』第一號、東大中哲文學會、昭和四十九（一九七四）年十月発行、一七七頁—一八九頁参照。

(13) 明治期の太陰曆から太陽曆への改曆に就いては、岡田芳朗氏『明治改曆—「時」の文明開化』、大修館書店、平成六（一九九四）年六月発行や、同じく岡田氏の『日本の曆』、新人物往来社、平成八（一九九六）年九月発行、「第四章、近代日本と改曆事業」の「3 明治の改曆」の項に詳しい。

(14) 『論語』公冶長篇に「子謂子賤。君子哉若人。魯無君子者、斯焉取斯。」とある。孔子が弟子である宓子賤（諱は不齊）を称美し、魯国に君子が居たからこそ、子賤は君子と称されるに足る人物となれたことが記されている。

付記 平成十六（二〇〇四）年は鴻溪の没後百二十年にあたり、「百二十年祭」が計画されていると聞く。このような時期にあたり、鴻溪の人物を顕彰することは少なからず意義があろう。本稿を草する所以である。

（ヤマザキ動物看護短期大学図書館情報センター司書）